

(抄 録) ○海百合の三新種 ○ハムシ類 ○開眼頭足類 ○雲南産鳥類 ○カヒガラムシの新属新種 ○三岐腸渦蟲の新種 二四

はれたる論文の續篇 (二) 及 (三) なり。Nymphalidae, Lycaenidae Hesperidae, Bombycidae, Geometridae, Noctuidae, Zygaenidae を論ず。色刷圖版を附する事前例の如し。
(永澤六郎)

●日本産海百合の三新種

CLARK, A. H., — "Three Interesting Additions to the Crinoid Fauna of Sugami Bay and Suruga Gulf, Japan." ("Proc. Biol. Soc. Wash.," XXIX, pp. 105-108, 1916.)

著者の相模灘及駿河灣産として記述せる海百合の新種三あり。其中初めの二つは DOREY, 終りの一つは OWSTON の採集せるものなり。

- (1) *Comantharia intermedia*, n. sp. 相模灘産。
 - (2) *Dichrometra doylei*, n. sp. 駿河灣産。
 - (3) *Prometra owstoni*, n. sp. 相模灘産。
- (永澤六郎)

●日本産ハムシ類

内田清之助。——新著紹介欄『新着論文』(17)。

『彙報』第九卷第一冊所載論文の續篇なり。屬 *Goniodes* 六種、中に新變種 *Goniodes lativentris* var. *major* あり。屬 *Goniocoles* 七種、中に新種 *Goniocoles macrocephalus* あり。
(永澤六郎)

●日本産開眼頭足類

佐々木望。——新著紹介欄『新着論文』(18)。

佐々木氏の日本産頭足類研究の續篇なり。合計二十二屬二十九種を細論す。中に新亞科 *Idiotenthininae*, 新屬 *Idiotenthis* 新種 *Idiotenthis latipinna* あり。沖の瀬四百尋産。
(永澤六郎)

●雲南産鳥類目錄

内田清之助・黒田長禮。——新著紹介欄『新着論文』(21)。
雲南産鳥類四十七種の學名を擧ぐ。中に新亞種 *Amphisp. maculatus yunnanensis* あり。
(永澤六郎)

●日本産カヒガラムシの新属新種

桑名伊之助。——新著紹介欄『新着論文』(22)。

著者の記載せる日本産カヒガラムシの新属一、新種七。

- (1) *Protopulvinaria japonica*, n. sp.
 - (2) *Asterolecanium bruchiscula*, n. sp.
 - (3) *As. hemisphaericum*, n. sp.
 - (4) *As. musuii*, n. sp.
 - (5) *As. litseae*, n. sp.
 - (6) *As. tokionis*, n. sp.
 - (7) *Nipponeuthozia ardisiae*, n. g., n. sp.
- (永澤六郎)

●日本産三岐腸渦蟲の新種

飯島魁・鍋木外岐雄。——新著紹介欄『新着論文』(23)。

著者等の記載發表せる三岐腸渦蟲類の新種十二あり。

- (1) *Procerodes luctet*, n. sp.
- (2) *Pr. trigonocephala*, n. sp.
- (3) *Pr. limuli*, n. sp.
- (4) *Balelocephala annululata*, n. sp.
- (5) *Pl. brunnea*, n. sp.
- (6) *Plenaria gonoccephala*, n. sp.
- (7) *Pl. papillifera*, n. sp.
- (8) *Pl. virida*, n. sp.
- (9) *Pl. pellucida*, n. sp.
- (10) *Sorachis suigoro*, n. sp.

- (11) *Polygela uncinata*, n. sp.
 (12) *Pa. kurofio*, n. sp.

(永澤六郎)

●近着邦文論說鈔(七)

(新著紹介欄)
 『新着論文』参照

(一八) 長谷部言人。——河南薦骨に就て。

著者の評論に對する松本理學士の批評に向つて、更に答辯したるものなり。大體論にあらず、枝葉論なるを以て、抄記はかへつて讀者の誤解を招ぐの虞ありと信じ、茲には摘記せず。唯主なる疑點なりとして、其產出狀態の説明を求め、又其追記として、本誌四月號に、松本理學士が、『人類及似人猿薦骨の比較』として論じたる所を批評し居る事を指摘し置くべし。

(一九) 川村多實二・中野治房。——湖沼生物帶の境界線。

『植物學雜誌』本年二月號に、中野理學士は野尻湖の植物生態を論じ、湖沼の沿岸部に對する歐洲の湖沼學者の定義を以て不完全なりとし、是が訂正を主張し、次の如くいへり。『フォーレルの湖沼學書によれば、沿岸部とは、生態學的に之をいへば顯花植物及車軸藻の生存下限迄を含むものなりと。……(されど)諏訪湖の如き顯花植物の生存區域より以深に車軸藻類なき時は、勢ひ顯花植物生存區域の最下限を以て沿岸部と深底部との境界となさざるを得ず。然る時は車軸藻の顯花植物以深に生ずる本野尻湖の如き沿岸部とは意味大に異なるものとなるべし。故に予は此にフォーレルの定義を變更して、顯花植物の生存下限を以て生態學的の沿岸部の下限とせんと欲

す。』然るに、川村理學士は右の提案に對し異議を挟み、琵琶湖・野尻湖等の動物分布に於て、フォーレルの定義の甚よく適合するを指摘し、『海綿類は琵琶湖岸到る處に於て、水面より車軸藻帶迄分布し、其外限以下には皆無なり。其他シミ・イシガヒを始め諸種の瓣鰓類、カハニナ・タニシの如き腹足類は勿論、環蟲類・甲殼類・昆蟲類の幼蟲等に其例多し。是に對し深底動物としても、珍奇なる見得』といひ、中野理學士の新定義の不合理なる諸點を列舉せり。右に對し、中野理學士は、湖沼沿岸部・深底部の區分に對し、フォーレル初め、動物の分布を重視せず、専ら植物の分布によるを主張し、自己の新定義を支持せり。

(永澤六郎)

雜 錄

●本邦産鰻の鰭に寄生する 粘液胞子蟲

曾て鰻の皮膚に寄生する二種の粘液胞子蟲(*Myxidium conguillae*, *Leitospora dermatobia*)を報告して置いたが、其後尙ほ東京に於て鰻の鰭に寄生する別種の粘液胞子蟲(*Myxidium*)あることを發見した。

此の胞子蟲は、鰭と曰つても背鰭及臀鰭に寄生するの